

2008年10月17日
志学会にて

イギリス17世紀の思想と現代

— Matthew Henry を中心に

新井 明

柳生直行氏（1920-86）が新訳『新約聖書』を新教出版社から出されたのは1985年であった。その出版記念会が関東学院大学の主催で、横浜駅ちかくのホテルで催され、出席した。わたしはあらかじめ「文学研究家としての柳生先生」を語るように、先生からのご指示があった。同席されたもうひとりのスピーカが有賀寿氏であった。

有賀氏は早くからマシュー・ヘンリの聖書注解の邦訳出版を考えておられたらしい。その事業の推進方法を柳生先生と相談しておられたのであろう。いま申し上げた祝賀会の後のある日、有賀さんはわたしを訪ねてこられて、その翻訳事業に加わることを求められた。柳生先生からのご推挙、とのことであった。新井はマタイ福音書。創世記は、たしか高野進氏と、お二人の間では決まっていたらしい。

当時、日本女子大学で各種の役職を負わされていた新井には、翻訳の作業も簡単には進められなかった。しかし1986年9月に柳生先生、ご逝去。これは大きな驚きであり、それがわたしの背中を打つ鞭となった。なにか怒れるがごとき思いでヘンリの翻訳に突き進み、1988年5月には第1巻（マタイ福音書、第1-4章）が出た。しかしその後、2000年3月に日本女子大学を定年退職するまでに、第3巻（8-10章）を出すにとどまった。

そうこうするうちに2003年春、北越の新発田市に移ることになる。この転機をヘンリ注解書の翻訳に用いようと決意した。そして6年。第4巻から第9巻までを、つまりマタイ福音書注解全体の翻訳の完成に漕ぎ着けることができた。新発田時代のわたしを共訳者として助けてくださったお2人がいるのだが、そのお1人、池貝眞知子さんはここにご出席である。

*

最初のうちは、ヘンリ注解書の日本語訳を手がけたのはわたしが最初であろうと思っていた。ところが、平戸領主・松浦静山（1760-1841）が寛政元年（1789）に長崎でヘンリのオランダ語訳注解を入手し、通詞・石橋助左衛門に訳させたと、『甲

子夜話』で名高いこの学者大名が『楽歳堂新蔵書目』に記している*。石橋はその書を「古今テストメント」とした。静山は「静疑ラクハ天教ノ書カ」と注記している。わたしが松浦史料博物館に問い合わせたところ、全部で14巻とのこと。実際にそこを訪れたのは1990年2月のことであった。館員の方がその14冊を積み上げてくれた。約1メートルの高さ。それで全部かと思っていたわたしは、驚いた。そのオランダ語訳は創世記から列王記までの訳でしかなかった。

それから2年後の1992年4月に、オクスフォード大学のボッドレイアン図書館に席をもらい、その5月にハーグの王立図書館へ飛んだ。あらかじめ連絡をとっておいたので、図書館側の対応は親切であった。すぐに判ったことは、オランダ語訳は全50巻、1792年完訳ということであった。

マシュー・ヘンリは1660年の王政復古のあと、王権に屈することなく「非国教徒」“non-conformist”として野に下った長老派の牧師フィリップ・ヘンリ (Philip Henry, 1631-96) の息であった。都市近郊に住むことの許されなかったこの派の牧師たちは教会での宣教はゆるされず、「家の教会」で安息日を守った。フィリップの苦難はその息マシューの注解での特徴を形成することになる。まとめてみれば、(イ) イングランド国教会 (またローマ教会) の儀式中心主義を排す。(ロ) ピューリタニズムの「狂信」を排す。(ハ) 聖書そのものの教えに立つ。(ニ) 平易なことばをもって宣教にあたる。(ホ) 求道者にたいして牧会への勧めを強める。これら諸特徴の基底をなすものは、まず個人に与えられた「理性と良心」の声に聴くという姿勢であった。

*

こうして野に追われた長老派牧師たちのこととの関連で考えられるのは、詩人・思想家ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) のことである。かれは少年期より当時の代表的な長老派牧師トマス・ヤング (Thomas Young, 1587?-1655) の膝下で訓育をうけた。だから、スチュアート王家の国教会中心主義に反抗して、1642年に出した『教会統治の理由』(*The Reason of Church-Government*) を見ても、それは恩師の論理を踏襲していた。この派では、教職者と長老が治める教会を小会とし、いくつかの小会がクラススとよばれる中会を構成し、教師候補者の決定・任職、さらには各個教会の監督に当たった。中会はさらに大会を構成し、最高決定機関としての総会をもった。つまり長老派はクラススを中軸とする、積み上げ方式の教会統治法をとったのである。これは主教中心の、トップダウン方式の国教会監督制とは、まさに正反対であった。

* 海老沢有道『日本の聖書——聖書和訳の歴史』(日本基督教団出版局、1964年・1981年)、66-67ページ。

ミルトンが長老派に違和感を感じなくなったのは、かれが『離婚の教理と規律』(*The Doctrine and Discipline of Divorce*)を公刊した1643年ころからのことで、この出版物に長老派がこぞって反発したことに端を発する。『教育論』(*Of Education*)、『言論の自由論』(*Areopagitica*)などを出版した1644年には、かれは「理性と良心」にもとづく個人の「選択権」を主張する論者となる。これは長老派ではなかった。これ以後は、内戦の時期、一途に議会の独立派に近い歩み方をする。

1688年の秋のクロムウェルの死後、チャールズ2世がロンドンへ戻る動きが生じたあたりに、かつての主教制の再来を危惧したミルトンは『自由共和国樹立の要諦』(*The Ready and Easy Way to Establish a Free Commonwealth*)を急遽執筆、発表する。1660年のことである。このなかで、かれは各州の主な都市に個別の「通常会議」を設け、それが州単位の「州会議」の選出母体となる。さらに州会議から代表者が選ばれ「中央評議会」を構成する。こうなると、かれがここで提議する「共同社会」案には、それより18年前に提案した教会統治法のボトムアップ方式、つまり長老派流の影が宿っていることがわかる。教会統治法と政治体制とでは、基本的には別に考えなくてはならない多くの点のあることは承知の上で、わたしはそれでも少年期のミルトンに沁み込んだ思考様式は消えていなかったと言うほかない。

王政復古をなしとげた政治情勢の中で、独立派と目されたミルトンの提案など一顧もされなかった。しかも、王党派が再生させた主教政は、(国王の帰還の方策にまで気をくばった)長老派をまで切り捨てる手に出た。1662年の「礼拝統一令」は国王への忠順、国教会祈祷書の使用、また国教会による再叙任をまで強制した。その結果、この強制に反対した約2千名の聖職者が「非国教徒」の烙印を押され、聖職禄を失った。

*

1660年の王政復古前夜以降のミルトンが長老派の思考様式を復活させたことは、とくに非国教徒という烙印を押されて野に放たれた長老派教職者たちの一部には驚きの経験を与えたのではなかったか。マシュー・ヘンリが書いた『フィリップ・ヘンリ牧師伝』(1698年)には、父の心中を察して、“I am here buried alive, but I am quiet in my grave.”という一行がある。これなどはミルトンの『闘技士サムソン』(*Samson Agonistes*, 1667)の100行目――

To live a life half dead, a living death

半生の生、生ける死を生き、埋められることも

を下にした一行としかとれない。王政復古後の「沈黙を強いられた教職者」たち約

2千人のなかには、クロムウェルの死とともに、(長老派的政界構成論を吐きつつも)表舞台を去った一詩人の行き方に共鳴する一部があったのかもしれない。

ミルトンの叙事詩『楽園の喪失』(Paradise Lost, 1671)は次のように終わる。アダムとエバが楽園から追われ行く姿である。

ふたりはうしろをかえりみ、いままでかれらの
幸(さきわ)いの住みかであった楽園の東側を見やった。

・ ・ ・ ・ ・

ふたりは思わず涙。が、すぐにうちはらう。
安息のところを選ぶべき世は、眼前に
ひろがる。摂理こそかれらの導者(しるべ)。
手に手をとって、さ迷いの足どりおもく、
エデンを通り、寂しき道をたどっていった。(新井 訳)

この結びは、おそらくは直接的には、詩人が夢みた共和政的「楽園」がクロムウェルの死後、消滅し、その楽園の到来に夢をかけた面々が死罪を課されたり、追放されたり、逃亡を(オランダへまで!)余儀なくされた時代に、「摂理こそかれらの導者」として「荒野」へと出てゆく者の背中に向かって、同情と激励をあたえた一節なのであろう。そして、もしかりにミルトン――王政復古時に長老派的な政治体制を主張したミルトン――に、「沈黙を強いられた」「非国教徒」――おもに長老派牧会者たち――への親近感があったとすれば、『楽園の喪失』の結びは、かれらをも視野に入れた情景を想定していたかもしれないのである。

そもそもイングランドでは、いまでも「非国教徒」の思想については、ちゃんとした研究がない。いわば蚊帳の外の人びとだからであろう。だから、この人びととミルトンの関係など調べる研究などない。最近Thomas N. Corns (ed.), *A Companion to Milton*なる研究書がでた(Blackwell, 2003)。やっとミルトンと長老派の関係が調査の対象になった。しかしここでも、マシュー・ヘンリのことにはふれることはない。(ドイツ語のルッター、フランス語のカルヴァン。それに匹敵するのが英語のマシュー・ヘンリであるにもかかわらず、である。)イギリス人はここら辺のことを、もっと真剣に勉強すべきである。

日本にも(前記したごとく)徳川時代にマシュー・ヘンリのオランダ語訳は長崎、平戸に入ってきていたのである。平戸に出入りするオランダ人たちに必要とされた注解書であったのであろう。また明治時代にもこの国に来た宣教師たちはヘンリ注解書(英語原書)を使っていたようである。そのことを裏づけるひとつの出来事と

して、成瀬仁蔵（1858-1919）が1885年（明治18年）の日記に「ヘンリー・マシュー」を引用していることを記しておこう。かれはH.H.レビット（1846-1920）や澤山保羅（1852-87）らに師事した伝道者で、のちに日本女子大学を創設した教育者である。明治期の日本でも、ヘンリ注解書は読まれていたのである。

*

さいごに付け加えておきたいことがある。先にも述べたことであるが、ヘンリ父子の牧会上の指針を、ここに再度申し上げる。（イ）儀式中心主義の排除、（ロ）「狂信」を排す、（ハ）聖書そのものに立つ。（ニ）平易なことばの使用。（ホ）求道者に牧会への道を勧める。これは現代世界——日本のみならず、全世界——に必要とされるエキュメニカルな宣教精神なのではないか。マシュー・ヘンリは今に求められていることを、今も語っているのである。

この聖書注解家を知って、23年。イギリス17世紀に生きた長老派の優れた牧会者の存在にふれ、わたし自身、同時代の詩人ミルトンへの理解にも重要な変革を迫られた。さらには、一平信徒としての生き方にも貴重な指針をあたえられたことを、深き謝意をもって、ここに告白したい。